実践事例　小学校４年

道徳の時間で活用する
～節度、節制～

宇部市立黒石小学校　田中　正己

1　本場面におけるポイント

● 読み物資料としての使用

読み物「少しだけなら」を読んで話し合うことにより、よく考えて行動することの大切さや、情報モラルに配慮しながら節度を守り節制を心がけることの大切さに気付かせる。

● 終末においての使用

「少しだけなら」に登場する主人公の思いを通して節度、節制について考えた後、巻末に掲載されている「じょうほうモラル」のページを使用し、具体的な場面を通して情報モラルに対する自分の考えを明らかにする。

2　授業の実際

１　主題名　よく考えて節度ある生活を

「少しだけなら」わたしたちの道徳　小学校３・４年　P16～19
「じょうほうモラル」わたしたちの道徳　小学校３・４年　P170～173

２　ねらい

よく考えて行動するとともに、情報モラルにも配慮しながら節度ある生活をしようとする態度を育てる。

３　展開

（１）導入　課題意識をもつ。

教師：ゲーム機についてのアンケート結果を話します。「９０人中、４０人。」これは、何の人数でしょうか。
A児：ゲーム機を持っている人の人数かな。
教師：実は、学校から帰って２時間以上ゲームをしている４年生の数です。
B児：たくさんいるんだな。
C児：もっと長い時間ゲームをしている人もいるよ。

□　指導上の留意点・支援・「私たちの道徳」活用のポイント等

事前に情報機器の使用についてのアンケートを実施しておく。特に、学校保健委員会での調査結果や考察、ノーメディアデーへの取組などを例にすることにより、情報機器との関わりを児童自身の課題として捉えさせる。

また、長時間ゲームをしている児童が多いことを意識させることにより、節度ある生活をすることの困難さに気付かせる。

（２）展開　節度ある生活をする。

教師：お母さんが、「ちゃんと使えたのね。約束も守ってえらかったわね。」と、あつしを褒めたのはなぜでしょう。
A児：あつしが、決められた時間を守ってパソコンを使っていたからです。
B児：でも、あつしは、そのほかの約束を守っていません。

C児：あつしは、名前や住所を入力しているので、約束を守っていません。
D児：あつしが何をしていたか、お母さんは知らないので、あつしは自分がしたことをごまかそうとしていると思います。

□　指導上の留意点・支援・「私たちの道徳」活用のポイント等

母親が主人公あつしを褒めた言動について考えさせることにより、誰にも見られていない場面でも節度ある行動をすることの困難さについて振り返らせる。また、パソコンを使う時間に対する節度だけでなく、情報機器を扱う際の節度についても考えさせる場とする。

（３）終末　情報モラルについて考える。

教師：あつしの行動から考えたことをもとに、コンピュータや携帯電話などの使い方について考えましょう。

【児童の記述】

◎　夜遅くまでゲームをしている まさお君に対して
　○　体のリズムがとれなくなり、病気になるかもしれない。
　　→　約束を守り、時々時間を確認するとよい。

◎　電話で「友達の名前と電話番号を教えてほしい」と言われたゆみさんに対して
　○　知らない人が電話番号を流したり、いたずら電話がかかったりすると思う。
　　→　「知らない」と言い、家の人に伝える。

◎　メールで「住所、名前、生年月日」の入力を促されたりょうたさんに対して
　○　住所、名前、生年月日を勝手に使われて、危ない目にあうと思う。
　　→　入力しないで、メールを家の人に見せる。

□　指導上の留意点・支援・「私たちの道徳」活用のポイント等

児童が遭遇する可能性がある情報機器による危険は、「少しだけなら」のようなインターネットでのＷｅｂ閲覧によるものや、情報機器への接触時間によるもののみならず、電話によるもの、電子メールによるものなど、多岐にわたる。

そこで、終末の場面で「じょうほうモラル」を使用し、具体的な場面を想定して危機回避をするための方法を考えさせることを通して、より実践的な態度を身に付けさせる。

「わたしたちの道徳」P172

3　実践を振り返って

当初、情報モラルを「節度、節制」と関連付けて考えさせることを円滑に行うことができるかとの懸念があった。そこで、母親が主人公あつしを褒める言葉に着目させることにより、児童は「誰にも見られていない場面でも節度ある行動をすることが大切だ」と気付き、電話による危険や、電子メールによる危険に対しても、よく考えて行動し、節度ある行動をすることが大切であると感じることができた。

本校においては、年間を通して学校運営協議会や家庭教育学級において、情報機器との上手なつきあい方について研修を推進し、学校、家庭、地域が連携を深めている。

今後も、道徳の時間に身に付けた内容を、家庭や社会で実践できるように、連携を強めていく必要があると感じた。